

序

肝疾患の診療の進歩は著しい。ここ20年の間にC型肝炎の発見からインターフェロンによるウイルス排除が可能になり、さらにリバビリンやプロテアーゼ阻害薬などより効果の高い治療法が次々に開発された。B型肝炎では、内服によって副作用がなくウイルス増殖を抑制できる治療が可能になった。その他画像診断や肝がんの低侵襲治療が普及し、分子標的治療薬が登場した。また、非アルコール性脂肪肝炎の症例が増加している。急速に肝臓診療が大きく変化し、数年前の知識では対処できない状態となった。

内科診療においては、さまざまな場面で肝機能異常に遭遇する。診断方法が進歩・普及したとはいえ、すべて診断が確定するには至っていない。それぞれの病態に応じた検査を適切に行い、診断から治療へと結びつけるプロセスが重要となる。そのためには、さまざまな症例を経験することが大切になる。

本書では、臨床的に遭遇することが多い問題点について、Q & Aの形で整理した。実際の臨床現場では、類似した症例を経験することが多いと思われるため、周辺の知識を加えて解説されている。したがって、同様の症例で疑問点がある場合には、似たようなQを見ていただけると関連文献からの知識が得られるような構成となっている。内科を専門としない医師でも肝障害に遭遇すると思われるが、「患者コミュニケーション」と「専門医へのコンサルト」といった欄を設け、多くの局面で役立つ内容を網羅するように心がけた。執筆は、実際に肝疾患を数多く診療している現場の専門医に依頼した。臨床に即した内容になっていると思われる。

平成20年に肝炎対策基本法が制定され、国をあげて肝疾患対策を適切に講じる必要がある。ウイルス性肝疾患に対する医療費助成制度や、身体障害者の認定、さらには医療連携によるインターフェロンを行った場合の連携加算の新設などの保険診療による政策誘導などの対策が講じられている。肝疾患対策はわが国の重要な政策課題となっているため、正しい知識で対処していくことが重要である。本書がその参考になれば望外の喜びである。

2011年5月吉日

編集 泉 並木
黒崎雅之